

私たちは、今夜イエス様の誕生を祝う降誕日の礼拝を守っています。イエス様の誕生を祝うのは、12月25日ですが、前夜からその礼拝を守っているのは、イスラエルなど中東では、日没から新しい日が始まっている、という伝統があるからです。

私たちは、今夕の礼拝で、沢山の聖書の箇所を読みました。それは、イエス様の誕生に関わる、マリヤとヨセフ、ベツレヘムの羊飼、占星術の学者たちなど、でした。これらの聖書を通して、私たちはイエス様がどのようにして生まれたのか、今年も改めて詳しく学びました。

ところが、クリスマスに読まれる有名な聖書、ヨハネによる福音書の冒頭の部分は、イエス様が誕生したという出来事の背後にある、隠された意味を、簡潔に私たちに示してくれています。そこに示された内容こそが、わたしたちがクリスマスを祝う理由なのですが、それについて学ぶことにしましょう。

ヨハネによる福音書は、イエス様、つまり神の独り子を「言」にたとえて言い表しています。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」という表現です。

ここで言う「言」とは、わたしたちが日常使っている、人々と話をして意思を伝えるための方法としての「ことば」ではありません。神様が使う「言」には、力がみなぎっているものです。そして、それによって物事を実現させてゆくような、存在の源のようなものです。

旧約聖書の初め、創世記1章3節で、『神は言われた「光あれ。」こうして光があった。』この時の神様の口から出てきた言のことなんですね。

ですから、今日の福音書を書いたヨハネは、この「言」という表現を使うことによって、世界ができる前、最初から神様と共にいて、天地創造のわざに関わった方として、神の子、イエス・キリストが存在している、と言っているんです。ベツレヘムで初めて存在したわけではありません。

天地創造の前から「言」として存在していた神様の御子が、人間の姿で私たちの内に住まわれた。つまり、神様と等しい位置におられた方が、「人間の子」となって、生まれてくださった、と言っているのです。

それじゃ、何のために、神の御子である「言」は、私たちの間に生まれたのでしょうか。

12節で「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」と書いています。私たちが「神の子」として生まれることができるようになるためだったのです。

永遠に生きている神の独り子が、この世に生まれ、「限りあるいのち」を持った、つまり肉を持ったものとなられたのは、滅びの運命にあったわたしたちが、「永遠のいのち」に生きる者となるためでした。

クリスマスは、単にイエス様が生まれたこと、その誕生日を祝うだけのことではありません。限りない永遠の方が、限りある肉の命をもってくださいったことによって、私たち限りある者が、滅びることのない命へと生まれることを可能にしてくださいった、ということです。

これは、イエス様が洗礼を受けられた、という出来事にも似ています。イエス様は、罪に汚れていないのだから、体を清める必要はありません。しかし、きれいな服のままに川に飛び込んでくださいったのです。それは、川の反対側でとり残されている私たちを、安全な側の岸辺に救い上げるためでした。

私たちを愛してやまない神様の独り子が、私たち人間の一人になって、わたしたちと共にいてくださるようになりました。イエス様の誕生は、私たちが永遠に生きる者となる希望の根拠である。だから私たちはそれを祝い、神様に感謝を捧げるのです。

今年は昨年のウクライナでの戦争に続いて、パレスチナのハマスのイスラエル攻撃がきっかけでしたが、今はイスラエルがパレスチナを徹底的に攻撃しています。

愛を元にした聖書の教えを最初に聴いたイスラエルの人々が、どうして今、隣人であるパレスチナの人々を殺さなければならないのでしょうか。

今は、伝統的な宗教の中でも、若い人々は自分たちの教えられてきた伝統に疑問をもち、人間の正しい生き方を求め、平和を訴えています。

私自身が神様によって造られたのと同じように、目の前の相手も同様であり、それぞれが神の似姿に作られているということを思い出して、相手に対する思いやり、愛情に目覚めてほしいと思うのです。